

鳴り止まぬ電話を朝から夕方まで受け続ける。たまにパタツと止まるときがあつて、一息入れたり、別の仕事に取りかかったりするが、どこかでゴングでも鳴っているのかまたひっきりなしにかかってくる。これも仕事と割り切るけれど、退職したらこの電話から解放されるのだ、という想像でやり過ごしている。「預かりしてもらえるとメールを読んだのですが。」

「はい、やむを得ずご家庭で見守る方がいない児童については、預かりをしています。」

島根県のいくつかの市郡は、これまでずっと休校措置をとらなかつた。全国の学校の1%程度というからかなりまれな対応だつた。おかげでそれぞれの学年の学習を終わらせることができた。密集を避けつつも、卒業式も入学式もできた。99%の学校にしてみれば驚異の粘りだつたろうが、それもここまで。

臨時休業の発表があり、同時に、子どもをみることでできない家庭は預かります、やむを得ない事情のある家庭に限り…、と付け加えられた。

「私が病院勤務なので休めなくて…。」

「急にはシフトを変えられなくて。」

やむを得ない事情で回っているみたいだ。「家族を見るための特別休暇があるんですけど、学校に言えば預かってくれるんでしょ、つて会社に言われて。」

「休校しているって、校長印を押した文書を添付しろつて言われたんですけど。」

ため息が出る。

預けられた子どもは子どもで、苦痛に耐えている。「お友達に近づいちゃいけません。」

「学校のものに触れちゃいけません。」

そんなアホな、である。親にも言い聞かされていたのか、初めはだれも黙って自習しているのだが、朝の8時から、夕方6時までそれが続くわけがない。耐えきれずに動き始める開拓者に先導されて、みんなキャッキヤと騒ぎ始める。笑顔をキラキラさせて。当たり前だ。

「抑えきれません。」

当番制で見守る職員が言うのを、苦笑いで返すほかない。気の毒で仕方ないのだが、追いかけてここに興じる子どもをたしなめに行く。

家にいる方がずつとましではないかと思うのだが、また明日も「やむを得ぬ事情」にうなづくことになりそうだ。

夕焼け通信

2020.4.20 1256号

編集 宮森健次

〒690-0823 島根県松江市西川津町4276-402
miyaken@me.com gosuitei.sakura.ne.jp/yuyake/

専業ババ奮闘記(その2) 2

木幡智恵美

インフルエンザ(2)

夫と二人がかりで義母の体を支えながら何とか車に乗せ、かかりつけ医に連れていった。診察の結果、インフルエンザだということでイナビルを吸引させられる。帰日も二人で体を支えながら家まで運び、ベッドに寝かせた。この様子では家の中でも移動が難しいので、公会堂の車椅子を借りることに。夫が区長をしていた際、補助金で購入したものだ。

葉の効果か、夜には熱が下がり、車椅子に乗せて台所まで連れてくると、水炊きを「おいしい、おいしい」と食べたので安心してた。ところが、翌日また熱が37度台になった。葉を飲まないといけないので何とか食べさせようとするが、食べたり食べなかつたり。百歳近いので、回復に時間がかかるのかなと思いつつ様子を見ていた。その間、全面的に介助が必要な状態になり、おねしょシーツの洗い替えを買いに行き、洗濯できる電気毛布を探し回り、たつぷり吸収の紙おむつを選びと、介護と介護用品の買い出しに奔走する。そうこうしているうちに、「あー」「うー」「おー」などの声を発するようになり、さすがに不安になってきた。「もう一回、診てもらおうよ」と夫に言い、全身脱力の義母をベッドから起こし、車椅子に乗せ、何とかかかりつけ医に連れて行く。聴診器を当てた医師に、「肺炎かもしれませんね。すぐ紹介状を書きます」と言われ、その足で総合病院へと向かった。

車椅子に乗せ、呼吸器科で受付を済ますと、それまでうつらうつらしていた義母が、「Mさん」と声を出す。隣に並んだ車椅子の中で、義母と同じデイサービスに通うMさんが眠っていたのだ。付き添いの息子さんによると、やはり、インフルエンザによる肺炎の疑いで紹介状を持って受診に来たという。Mさんの後の並び順だったので、血液検査、レントゲン、診察と回りながら息子さんといういろ話した。私たちとほぼ同年代だと思われる息子さんはまだ現役の勤め人で、車椅子生活のMさんを家に一人おろわけるにはいかず、週六日デイサービスに通わせているとのこと。仕事に家事に介護、一人で何役もこなしておられるのだ。



30代フリーター やあ、ジイさん。新型コロナウイルス対策でようやく政府がひとり10万円の一律給付へ舵を切った。遅すぎるうえに、事業者への休業補償は拒んだままだ。なぜ政府はこんなにかたくななんだ。

年金生活者 田原総一郎のメルマガジンによると、安倍晋三は官邸を訪ねた田原に「緊急事態宣言がなぜこんなに遅れたのか」と問われて、「ほとんどの閣僚が反対していた」と語り、財政問題が理由だったと説明したという。だが、その理由は錯覚をもとにしたものに過ぎない。

自国の通貨を発行している政府の赤字は、家計や企業の赤字と違って、破産につながることはあり得ない。通貨を発行しさえすれば、いくら借金しても返せるからだ。まして現在のようなマイナス金利の時代には、借金したほうが赤字が減る。

30代 そんな打ち出の小槌みたいな話だが信じるんだ。

年金 貨幣があがたがられるのは、い不变価値はどこにあるか。属性にないとすれば、個人の存在そのものにあると考えるほかない。これから先も新型コロナウイルスのようなパンデミックが繰り返されると、そのことがきわだつてくるだろう。

30代 政府に危機感が足りないという批判がある一方で、騒ぎ過ぎじゃないかという見方もある。

年金 新型コロナウイルスは私たちの社会にメデイカルな対処だけでなく、メンタルな対処を迫っている。未知のウイルスへの恐怖と不安を放置すれば、大勢を集中的に病院に向かわせ、医療崩壊を招く恐れがあるからだ。

もし新型コロナウイルスが未知のウイルスでなく、既知のインフルエンザウイルスだったら、恐怖も不安もはるかに少ないはずだ。既知のインフルエンザの感染者、死者は新型コロナウイルスよりずっと多いのに、人びとはコロナほど恐れていない。ワクチンの接種率40%弱という調査結果にそれがあらわれている（「わが国におけるインフルエンザワ

それでどんな富でも手にすることができると信じられていたからだ。その信仰は富が稀少だから成り立つ。もしあり余るほど富があれば、貨幣があがたがられることはない。資本主義の高度化とテクノロジーの発達はいま富の稀少性の縮減を加速し、貨幣への信仰を揺さぶっている。

だが、安倍政権の閣僚も財務省もその信仰に囚われたままだ。貨幣を富の中の富と信じ、それを分配する力こそ自らの権力と考えている。だが、貨幣は富ではない。国家にとつては富の再分配のための手段にすぎない。それをため込んでなんの腹の足しにもならない。「財政問題」を理由に出し惜しみすれば経済を弱らせ、国民生活を損なうだけだ。

30代 外出を制限されてみんなどんな毎日を送ってるんだらう。

年金 大多数の人たちが不自由な生活を強いられる一方で、逆に生きづらさをいくぶんか緩和された人たちもいるはずだ。

クチン接種率の推計」。

未知ゆえの恐怖と不安は現実のリスクよりも過剰になる。人間は未知の危険に遭遇すると、そこにだけ目を凝らすようにできており、既知の危険と比べながらそれを見る余裕を持たない。世界のすべてが未知の危険でおおわれているように感じ、全体を俯瞰することができない。それができるようにするには時間を要する。そのために起

引きこもりに苦しんでいた人たちは、家に居続けることが感染拡大防止に貢献すると聞いて、少し安堵したかもしれない。強迫性障害のために頻繁に手を洗うのをやめられない人は、だれもがせっせと手を洗い始めたことで、多少なりとも緊張を和らげることができたかもしれない。

学校でいじめられていた子供たちは、休校という願ってもない幸運に心ひそかに万歳したのではないか。人づきあいの苦手な人たちの中には、他人との接触を避けるように求められ、「それなら得意」と思った人もいるかもしれない。

活動的、社交的、細かいことを気にしないといった、平時ならプラス価値とされる個人の属性を、新型コロナウイルスは一時的にマイナス価値に変えた。流行が落ち着き、それらがプラスに戻っても、私たちはそれがいつまた変わるかわからないことを知ってしまった。

環境によって変わる属性の価値を可変価値と呼ぶなら、環境に左右されな

きるかもしれない医療崩壊を食い止めるのが現在の最大の課題となつてくる。

30代 どうしたら止められるんだ。

年金 集中治療室や人工呼吸器、それを扱うスタッフなどが必須となる重症者の数を抑えなければならぬ。そのためには爆発的な感染を避け、緩やかな感染拡大にもつていく必要がある。

ウイルスを人為的に消滅させることは不可能であり、緩やかな感染によって、あるいはワクチンの開発によって集団免疫を獲得し、感染爆発が起こらないようにする以外にない。かつての新型コロナウイルスともそうやって私たちは「共存」している。

今後も未知のウイルスのパンデミックが繰り返される可能性がある以上、医療システムの更新と拡張だけでなく、恐怖と不安を和らげるための恒常的な「安心」の仕組みの構築を各国政府やWHOは迫られるだろう。だれよりも世界の諸国民がその必要性をコロナで思い知ったはずだ。

ニュース日記 734 中村 礼治

危機感が足りないのか、 騒ぎ過ぎなのか